

論文

中国語学習におけるレアリアとしての “口述実録（インタビュー）”活用について

塩山正純

要旨

レアリアつまり看板、チラシ、食品のパッケージ、メニューやレシピ、パンフレット、雑誌、小説、漫画やアニメ、テレビ・ラジオの番組やその間のCMなど様々な媒体などの実物教材を活用した学習が中国語教育の現場でも、その有用性のゆえに注目されつつある¹⁾。筆者も中上級の講読科目で“口述実録（インタビュー）”を用いた授業をおこなっており、自習を希望する学生には個別の添削指導もおこなっている。本稿ではレアリアのひとつである“口述実録”を利用した学習が語彙・語法はもとより、ことば、この場合では中国語の文化背景などを理解する際に、如何に有用な材料であるかという点について、講読科目や個別指導における具体的事例を挙げつつ論じるものである。本稿の考察を通して、“口述実録”を利用した学習は、とくに文法では補語構造を中心として初級或いは準中級レベルから中級へのステップアップ、そして中級から上級への作り物ではない文脈での反復学習に格好の材料であり、また特定のテーマを軸とした語りによりある分野の語彙が文脈の中で集中的にマスターできる可能性を持っていることを提示する。

0. はじめに

外国語の学習は、初級テキストでの基礎がためから中級に進む段階になると必然的に生の外国語との接触がはじまる、ネイティブとの会話も目標の一つである。中国語も例外ではなく、会話つまりネイティブとのコミュニケーションにおいて自ら発信するには「話題と道具」つまりトピックとそれを語るための単語と文法が必要となる。

また、外国語の学習は、語彙と文法という道具だけをいくら溜め込んでも足りないのであって、千野栄一(1986)が「外国語を理解するということは、とても難しい。話されたり書かれたりした内容がよく分かるためには、母語の話し手が意識してあるいは意識せずに身につけたレアリアの知識を、われわれは意識して身につけなければならない」というように²⁾、学習しようとする言語のネイティブが無意識に有していることばの文化背景についても理解し知識を蓄積していく必要がある。

「語彙と文法」という技術の面と、「ことばの文化背景」という知識の両面があってこそ外国語の上達が望めるわけだが、前者に限るなら従来の「読み」「聴く」学習だけでも手に入られるが、両方を同時に学べる最適の素材としては「レアリア」と呼ばれる「作りモノではないナマの」教材が有用である。「レアリア」も様々あるが、動画、新聞やテレビ・ラジオのニュースなどもその一例で、作りモノでない分、使い次第で、興味を持続しながら学習できる頼もしい道具になる可能性を持っている。本稿ではインタビューの記事を対象を絞ってレアリアの教材としての価値を検討してみたい。

1. 中級テキストと“口述実録”

一般的に中国語を専攻して専門的に学習するケースはごく少数で、大多数の学習者は、大学生の場合なら第二外国語として中国語学習をスタートし、少ないところでは、1年生の春秋の週1コマのみ、伝統的なところでも週2コマずつで一年計4コマの場合が一般的である。大学によってはそこから先の学習を望む学生に配慮して選択クラスが設けられているが、無ければその先は自学自習となる。第二外国語としてクラスで学ぶ場合、テキストは一般的に出版社が出している初級や準中級のもので学び、さらにその続きの科目が設定されている場合は、市販のものから難易度の高いテキストを選んだり、レアリアを選んだり、会話にシフトするか講読にシフトするか、担当する教員のカラーでその幅もかなり広がりを見せる。

たとえば愛知大学国際コミュニケーション学部(第二外国語)の現行カリキュラム(2016年度)とテキストを見てみると、一年生の必修週2コマは初級としては比較的難易度の高い『中国語への道 近きより遠きへ(改訂版)』(金星堂)、『キャンパスライフ中国語 改訂版』

(白帝社)の二冊で学習しており、きちんと学習すれば一年でそれなりのレベルには到達する。二年生は一年間必修週1コマで、テキストは難易度が一年生の二冊と同レベルの『中国語明明白白』（東方書店）で会話中心の授業である。ここまでの必修で、さらに会話を学習したい学生のために、共通科目では二年生からの中国語演習、学部科目では三年生の中国語応用会話がある。限られた時間数ではやはり学習者のニーズとの兼ね合いで、内容は会話中心にならざるを得ないところがある。

すでにカリキュラム変更で廃止されたが、旧カリキュラムでは共通選択科目に荒川・周(2003)『中国見たり聞いたり15章』（同学社）の講読で文法理解を目標とする科目があり、この延長線上で、三年生の学部科目である中国語テキスト講読でインタビュー記事を利用した学習を実施してきた。文法理解の橋渡しの科目の廃止で、必修科目だけを終えたばかりの学生には少々ハードルが高いが、現在でも中国語テキスト講読でインタビュー記事を利用した学びを継続している。ちなみに上述の『中国見たり聞いたり15章』は留学、学生生活、結婚（独身貴族、夫婦、国際結婚）、街角、エステ、就職、レジャー、マイカー、帰省、住居、飲食、マナー、プチブル、ネット社会などをテーマに中級レベルで覚えておきたい文法・語彙を駆使したエッセー風の本文と文法・語彙の重点、練習問題で構成されている。理想を言うならばインタビュー記事で学ぶ前段階で、このような読み物と文法理解が一体化したテキストで学んでおけば、インタビュー記事を使った学びがそこから先へのステップアップとしてより効果的になる。

読み物が読めるレベルになると、吴晓露他(2008)《说汉语谈文化》(北京语言大学出版社)などの、専門家が外国人の中国語学習のためにこしらえた中級、上級のテキストで勉強することが、規範的な中国語をマスターする上で効果的であるが、一方で、こうした教材はあくまでプロによって「作られた」ものであることは否めない。本稿の意図は、プロの作成した教材と並行して、レリアアの“口述実録”を使って学ぶことの効果を指摘しておこうと言うものである。重要なのは「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」というどん欲な考え方である。また、既存の辞書や文法の参考書にはなるほどと思わされる記述が多く、読み物としても面白く、文法事項の確認にはとても役立つ存在である。しかし、一般的には、実際に具体的な疑問にぶちあたったときにこそ一番その効果を発揮する寄り添った存在であって、よほど辞書や参考書が好き、という場合を除いて読み物として楽しむ学習者は少数であろう。必要に応じて既存のテキストや辞書、参考書も利用しつつ、同時に、文法・語彙の制約を受けないレリアアの“口述実録（インタビュー）”の自由な語りの文脈の中で、一つ一つの単語の意味と文法がどう活用されているのか、全体としてとらえようとする視点或は力量を養うことも肝要なのである。ここにリアルさをもとめた“口述実録”の独り語りの出番がある。

2. 実は伝統的な“口述実録”を教材とする授業

“口述実録（インタビュー）”を活用した中国語学習は、じつは目新しいものではなく、伝統的な教材でもある。と言うのも、筆者自身が二十数前に大学三年生のころ、関西大学の日下恒夫教授の講読の授業でこういうものを読んで勉強しているのである。テキストは張辛欣・桑晔（1986）《北京人 100个普通人的自述》所収の幾つかの作品であった。同書は折しも中国では改革開放がスタートして間もない時期に出版されており、街角も市民も幾許かの開放感から、自由に話すことに抵抗感のない明るさを感じさせる時代に、北京の一般市民の生にちかい声を拾ったものである³⁾。例えば、筆者が授業で読んだ「〈骑车人〉 赵淑兰, 女工, 二十九岁。」は、ある19歳の女性労働者が自転車での通勤途中にインタビューに応じたもので、つぎのように語り出す。

好吧，我跟你们谈一会儿。我觉得挺怪的，从来是访问先进人物，真没听说有拦住人家打听骑车感想的。骑车是最平常的事儿，谁不骑车上下班？真没多少人坐汽车。…（中略）…我们那一届初中生全分配在城里了，我是一九七一年底进厂的，是头一届不插队的学生。…（中略）…买一辆车不容易。钱不钱的甭提，单是车票儿就头痛。我这辆车等了三年才分上票。…（中略）…只上一次税，领一个执照和一个车牌。一共八毛钱。除了这个税中国人没税。[いいわよ。ちょっとお話ししましょうか。でも変わってるわね。元々（こういうのって）時代をリードするような人を訪ねるんじゃないの。ひとを呼びとめて自転車に乗ってる感想聞くんなんてほんと聞いたことないわね。自転車に乗るなんて普通のことだし。だってみんな自転車で通勤してるんだから。ほんとクルマで通勤なんて珍しいことだものね。わたしの中学ん時の学年はみんなマチの仕事を配属されたわね。わたしは1971年の暮れに工場に入ったんだけど、下放されなかった一期目の生徒だから。（中略）自転車一台買うのも大変なんだから。お金の有る無しじゃなくて、ずばり自転車配給きっぷが大変なのよ。（中略）税金を一回だけ納めたら、許可証とナンバープレートをもらって、全部で8角だったわね。これ以外に中国人は税金がないから。]

おおよそ学習二年目くらいまでの文法事項がベースになっていて、文法の復習という点でも役立つ素材であった。中国のインタビュー記録は往々にしてインタビュアアのあいの手が端折られているために、最初は話題の切れ目などに戸惑うことも多いが、慣れてしまえば、臨場感あふれる生き生きとした語り口で、先を読みたい、という衝動に駆られ、学習意欲が持続する。同時に、単語の表面的な意味が分かっても、結局その人物が喋っていることばの文化背景にまで考えが及ばなければ、主人公の言っている本当のところを幾ら

も理解できていない,ということに気づくきっかけも用意されている。例えば“先进人物(先進的な人物)”“上下班(出退勤, 通勤)”“分配(職場へ配属する)”“城里(まち, 都市)”“插队((文革時に)農村に行き人民公社の生産隊に入ること)”“分上票(きっぷが割当てられる“上”は方向補語)”“执照(証明書)”“车牌((この場合自転車の)ナンバープレート)”などの語彙は(当時の)実際のコミュニケーションの場面では出現頻度の高い語句であるが一般的なテキストにはまず出て来ないものである⁴⁾。本書はテキストとして使用するにも分量的にほどよく, 内容的にも面白いが, いかんせん出版からすでに30年が経過しており, いまの学生にとっては生まれる前の歴史の世界である。知識を蓄えるのならともかく, モチベーションは湧かないであろう。学習効果が期待できる, いまの時代に合った“口述実録”が必要なのである。

3. “口述実録”を検索してみると

インターネットの検索サイト《百度》で“口述実録”をキーワードに検索してみると, 実は上位に挙がってくるのは, タイトルが《保姆口述: 竟习惯被男雇主压在身下》, 《读博士的男友竟强迫我看A片》など, いかにも際どくて人前では読めなさそうで, 授業やグループ学習には使えなさそうなラインナップである。例えば, 《我做了姐夫五年的地下情人》というインタビューの冒頭は次のような語りで始まる。

我们姐妹3个, 我是老小, 大姐整整大我6岁。我还记得在我刚上初中那年, 当媒人第一次把姐夫带到家让全家“相看”时, 我都惊呆了:(中略), 看上去非常性感又讨人喜欢。心里竟冒出这样一种怪怪的想法: 为什么妈妈早生的是大姐而不是我呢? [うちの三姉妹のなかで, 私は末っ子で, 上の姉はわたしよりちょうど6つ年上なの。あれはたしか, わたしが中学へ上がったばかりのころ, 仲人さんが初めてお義兄さんをうちに連れてきて, 顔合わせがあったの。その時わたしはすっかり(彼に)魅了されてしまったの。(中略) 見た目がとってもセクシーで人好きするタイプ。(このとき私の)心の中にいけない考えが出て来てしまったの。どうしてお母さんが先に産んだのがお姉ちゃん, 私じゃなかったのかしら。]

いかにもこの先を知りたい衝動に駆られる展開であることか。もちろん内容的にきわどく, お世辞にも高尚とは言えないものであるだけに, 難解な表現も少なく意外に読みやすい文章で, 自習には向いていると言えるかも知れない。いかんせん授業には些か不向きでることが惜しい作品である。

4. 使える教材 安頓の“口述実録”はひとりの人間による語り

インターネットの“口述実録”に安心と常識そして楽しさを兼ねるものは多くなく、教室であるいはグループで人の目を気にせずに利用できるものとなると、一応、単行本として刊行されているような一定の品性を保ったものが望ましいと言える。さらに質と内容の確実性を求めるならば、やはり《絶対隐私》《结婚吗》などすでに単行本になっているものが良い。インターネット上の“口述実録”に比べてソフトで公衆の面前で使える可能性もぐんと上がる。但し、もし授業で使うなら、予めクラスの雰囲気醸成しておく必要があることは言うまでもなく、準備を怠るとあらぬ嫌疑をかけられることにもなる。安頓のインタビュー記事の内容的傾向としては、障碍者の恋、負け犬の結婚問題、薬物中毒者支援ボランティア、年の差恋愛、美魔女などなど、割と人生を考えさせられる感じのものが多く、年齢でいえばだいたい30歳を過ぎたくらいから、インタビュー対象の彼ら彼女らが話している内容に共感できると言えようか。ある程度の人生経験があれば、割と内容に入っていくやすく、次の展開が気になって、ついつい辞書を引きたくなるという利点もある。後述するように文法事項を網羅した中級テキスト（例えば荒川・周（2003）『中国見たり聞いたり15章』など）の学習事項の格好の復習の機会でも、さらに次のステップにも繋がるのである。

5. “口述実録”で何を学ぶか 安頓の《结婚不能让人更幸福，不如不结婚》を例に

《结婚吗》所収の《结婚不能让人更幸福，不如不结婚（結婚しても今より幸せになれないなら、しないほうがマシ）》は全16ページのインタビューで、高学歴で外資企業勤務の「負け犬」で「おひとりさま」予備軍のキャリアウーマンによる結婚観についての語りである。人生を考えさせられる安頓の“口述実録”の作品のなかでも、おさえておきたい語彙や文法事項、そしてことばの文化背景がクリアに浮かび上がってくる秀逸なテキストである。ここからは学習に役立つポイント毎に順を追って見ていきたい。

5.1 同じく漢字をつかう言語ゆえの新たな発見

中国語は日本語と同じく漢字をつかう言語であることから、学習者が最初のハードルを低く感じる言語ではある。しかし、それは決して中国語が易しい外国語ということではなく、学習にゴールがあるとすればそこまで要する努力は外の外国語と同じである。こんなアドバイスが学習初年度の初級クラスで担当教員からしばしば発せられるが、ただ初級の段階では同じ漢字でも音が違う、という発音面での気づきはあるものの、学習範囲が限られている

ために、見た目は同じでも意味が違う同形異義にまで意識できるポイントは少ない。それが中級レベルになるとそのあたりへの意識が必要になってくる。例えば、中川正之（2005）で「要注意！」の同形語として「吸引」などの例が説明されるように⁵⁾、ふだん意識していないような用例は意外に多い。意識的に参考書を読めば別であるが、作られたテキストで学ぶだけではこうした例に出会うことも稀で、また出会ったとしても往々にして見過ごされがちである。もちろん、荒川・周（2003）のように中級テキストでも、作られた文脈のなかで効果的にこうした語彙を提示している例も少数ではあるが、無いわけではない。例えば、大学時代のクラスメートの友情について語る一節で“同学的情谊就是在那个纯真的年代建立和巩固起来的。”[クラスメートの友情はほかでもなくあの純真な年代にむすばれて確固たるものとなったのです。]などはその好例であろう。いっぽうで、インタビュー記事にはこういった用例が、実に頻繁に出現する。例えば安頓（2011）《结婚吗》所収の《凤凰男和孔雀女的较量》の一節でも、一つの文に“吸引”と“建立”が使われていたりする。

“我原来不接受相亲介绍对象什么的，总觉得还是应该自己去遇见一个喜欢的人，从互相吸引到慢慢建立起感情，比较自然。”[ボクはもともとお見合いとか結婚相手の紹介とかいうのを利用したことがなくて、やっぱり自分から好きな相手との出会いを見つけて、惹かれ合って、だんだんと愛を育んでいくほうが、割と自然じゃないのかといつも思っていたのです。]

ちなみに『明鏡国語辞典』初版では、この二語は「[吸引]きゅういん《名・他サ変》①すいこむこと。また、すいつけること。「酸素を——する」「——力」②人を引きつけること。】、そして「[建立]こんりゅう《名・他サ変》寺院・堂塔などを建てること。造立ぞうりゅう。「本堂を——する」と記述されている。「吸引」の二番目に「人を引きつけること」が挙げられているが、ふつうの日本語の生活であまり連想される意味ではないだろう。では中国語ではどうか。《现代汉语词典第7版》では“吸引”が“把别的物体、力量或别人的注意力引到自己这方面来：～力|这出戏～了不少观众”，“建立”が“①开始成立：～政权|～新的工业基地。②开始产生；开始形成：～友谊|邦交。”、小学館『中日辞典第2版』ではそれぞれ“吸引”が“（関心・注意・注目などを）引きつける，集める．世界杯赛～了很多观众|ワールドカップの試合はたくさんの観衆を引きつけた．”“建立”が“1 打ち立てる．造り上げる．築き上げる．～新中国|新中国を打ち立てる．～新的工业基地|新しい工業基地を建設する．2（関係を）形成する，確立する．～友谊 1 友誼を結ぶ．～外交关系|外交関係を打ち立てる．”としている。

このように辞書や参考書などでは的確な説明が箇条書きで提示されたりしているが、レア

リアの効用の一つとして、それが特定の話題の文脈の中で「生きた意味を持って」使われているものを直接読むことで体験できる、という点を挙げることができる。学習者は、なまじ日本語で読めてしまう単語であるために、辞書を引かないことが多く、文全体を日本語訳してみても「どこかおかしいな」と薄々気づきつつも往々にして「こんりゅう」「きゅういん」の常識的な意味で突っ走り、“互相吸引”を「お互いにきゅういんする」，“建立感情”を「感情をこんりゅうする」と読むようなことがおこる。レアリアを教材とした場合、実はこの間違いからスタートして、辞書を引いて日中の漢字の差異に気づき、さらに教授者からの適切な解説が加わり、文脈全体から意味をつかむ良いきっかけになる。レアリアはまた、中国語母語話者の日本語学習のための逆方向のテキストとしても活用が可能である。ちなみに、後述する作品《結婚不能让人更幸福，不如不结婚》でも“同居”や“隔壁”といった漢字語の例があるが、もちろん「どうきょ」や「かくへき」ではなく、「同棲」や「お隣さん」の意味で使われていることは言うまでもない⁶⁾。

5.2 中級なら知っておきたい表現 (1)

日本語では普通に使うが、中国語でなんとするか思いつかない語句

日本語の日常会話では頻繁に使うのに、さて中国語では何と言うのか、なかなか思いつかない、思いつけない表現は多い。それなりの内容を伴う会話の場面や作文には当然こうしたものが必要であるが、やはりこれも“口述実録”を活用して単語を増やしていくのも一つの方法である。例えば、《結婚不能让人更幸福，不如不结婚》で取材対象が語り始めるその冒頭を見てみよう。

我 35 岁。按现在找对象所说的个人条件，除了年龄，其他条件都不算差。大学本科毕业，外企中层职员，有房子，不用付按揭，独生女，父母有退休金有房子不需要我养活。长相不算丑——我觉得在这个城市里，这种长相算中等偏上。[私は 35 歳。今どきの結婚相手を探すときの個人の条件に照らして言うと、年齢を置けば、そのほかの条件はどれも劣っているという程ではないわ。大学の学部を卒業してから、外資系の中間管理職（社員）をしていて、家もあって、ローンを払う必要が無くって、一人っ子（一人娘）だけれども、両親は年金があって家もあるから、私が養う必要がないの。見た目（ルックス）はブスじゃない。このまちじゃあ、こう言ったルックスは中の上じゃあないかしらと思うんだけど。]

中級・上級へのステップアップを目指す場合、「読み込み」つまり文法構造を理解して話の展開についていきながら、文法項目の復習と習得とを持続し、そして「寄り道」つまり見慣れないけれども身近な単語からことばの文化背景の理解へとつなげていくことが鍵となるが、興味が持続可能なテキストを使うことがより効果的であることは言うまでもない。荒川・周（2003）『中国見たり聞いたり15章』などは必要な文法事項を網羅しながら興味の持続も意識したテキスト本文で、例えば主人公の友人が「日本に帰国して就職した」くだりで「卒業以后…（中略）…美紀回日本在一家公司当职员。[卒業してから…（中略）…美紀は日本にもどってある会社に就職した（直訳：ある会社で社員になった）]”というような現実に則したような本文・例文も見られる。しかしテキストとしての性格上、限られた字数の中で様々な文法ポイントを網羅したうでの展開であるから、そのボリュームはどうしても少なくなる。その点、“口述実録”はテーマに沿って話しているわけで、引用文中の囲みの語句“対象、本科、外企、中层、职员房子、按揭、独生女、退休金、养活、长相、城市”などのように、それなりにまとまったテーマに沿った語句が集中的に出現する。またこれらの語句は、その内容によって“対象、房子、独生女、长相、城市”なら恋愛・結婚、“外企、中层、职员”ならキャリア、“房子、按揭、城市”なら住宅問題、“独生女、退休金、养活”なら将来の親の介護問題というようにある程度のカテゴリーに括って理解することもできる。そしてこれらのカテゴリーをそれぞれ互いにリンクさせて広がりを持たせていくことが可能なことは言うまでもない。ある語彙が複数のカテゴリーに入ってそれぞれの器の中でなかまの語句と関連づけられるのも当然のことで、さらにそれらをシナプスのように学習したもの同士でつなげていけば良い。また“中等偏上”などは、会話でレベルを表現して「中の上かな。」というような場面で頻出する表現で、ここからさらにレベルを表すような様々な表現へと展開していくきっかけにもなる。

5.3 中級からは知っておきたい表現（2）

初級でならう語句の意味的ひろがり

もちろん、初級レベルの語句でも、“口述実録”なら、初級テキストではまず提示されることのない中国語の各語彙が本来カバーする広がりとお行きが実感できることが多々ある。《结婚不能让人更幸福，不如不结婚》でも「日本語では普通に使うけれども中国語で何て言うのだろう」と悩むような表現が頻出する。例えば、主人公が台所で母親と“鱼（さかな）”を料理しながら言い争ったことを回想する場面には、“我想给他俩**做**条鱼吃（両親に魚を料理して食べさせたい）”，“她在厨房**收拾**鱼（台所で魚の下拵えをした）”，“不让她**动**那条鱼（その魚を触らせなかった）”といった表現が出てくる。動詞は初級レベルの“**做**（作る，す

る)”, “收拾 (片付ける)”, “动 (うごかす)” だが, いずれも初級テキストでの既習の意味では通じない例である。極付けは“我把鱼搁在水池子里”で, “池”とは何であろう。ため池, 否, プール, 否。では, 魚を池に放して功德を積んだか, 否。何のことはない「(いま下拵えしていた) 魚をシンクの中に置いた」のである。また, “楼”は平屋に対して二階建て以上を指す語であるが, 辞書やテキストなどでは「ビル」などの意味が与えられていることが多い。では“先说我妈住的楼。这楼里都是老同事,”はどうか。「お母さんのビルのオーナーで, そこには古くからの同僚だらけ」という訳ではないのである。また「お母さんはビルに住んでいる」と捉えてしまうと何だか妙な意味にもなる。もう少し頭をひねって「誰が住むどんな場所なのか」を考えてみる必要があるのである。いずれも, これらはセリフの応酬や具体的な動作や情景描写から, 中国語の語彙のもつ意味の守備範囲やことばの文化背景をクリアーに理解できるという, インタビューの特長を示す好例だと言えるのである。

5.4 中級からは知っておきたい表現 (3)

少し教養のある中国人なら誰でもつかう成語や熟語

さらに, 中国語ではニュースや新聞・雑誌などの媒体が四字の熟語や成語を多用する傾向があり, 中国人も教養レベルが高くなればなるほど会話の端々に四字句を使う頻度が増す。例えば《结婚不能让人更幸福, 不如不结婚》だけでも, “我没玩世不恭 (wánshìbùgōng), 我想说的是其实我真不是故意掉队, 说不清楚究竟怎么回事, 反正阴差阳错 (yīnchāyángcuò) 的。[わたしは不真面目で不遜な訳ではなくて, わたしが言いたいのは実のところわざと (結婚市場から) リタイヤしたんじゃないのよ。結局のところどういうことなのか上手いこと言えないけれども, 要するに偶然にボタンを掛け違えたってことよ。]”の“玩世不恭”や“阴差阳错”をはじめとして, その他ざっと見ただけでも“一脸清纯, 愁眉苦脸, 苦熬岁月, 百口莫辩, 心酸曲折, 熬白头发, 强颜欢笑”などの用例が見られる。たしかにこれらの用例は荒屋 (2000) や沈・紅粉 (2014) などの学習用成語辞典には出現するものではない。しかし筆者自身が2016年のとある台湾出張の折り, 用務先が用意してくれた公用車の運転手との小一時間の会話の中で相手の口から授業で出たばかりの“阴差阳错”が出て来たときには小さな感動を覚えたという例もあるように, 実際の会話には出現する。中検の上位級での出題ばかり, 上級への道のりで避けては通れないアイテムの一つである四字熟語・四字成語も, 中国語の話の展開の「型」とあわせて“口述实录”を通して慣れておくことのできるポイントでもある。安頓の取材対象者には, 熟語・成語を多用するインテリが一定数いて, こういう点でも侮れないのである。

5.5 中級からは知っておきたい表現（4）

たとえ話で言いかえるときの表現

例えば、自分の身の上のエピソードを語る時、たとえ話に言いかえて説明を加えるようなことも実際の会話では起こりうるが、次のようなものはその好例であろう。

- (1) 婚活サイトでの売り手と買い手の様子を食材市場にたとえる。

像逛**菜市场**，东西摆在那，这个看看放下，那个捏捏弄弄放下，很不舒服。[食材市場みたいなもので、品物が並んでいて、これをちょっと見ては戻し、あれを突ついたり持ってみたり、なんて居心地わるいのかしら]

- (2) 世間の「結婚市場」での自分の立ち位置を特売品にたとえる。

老觉得自己了不起，都这个岁数了，还不能正确认识自己其实在婚姻这个**菜市场**里已经是**特价商品**。[いつも自分が大したものだと思うわ。もうこんなに年をとっちゃったのに、実際は結婚の食材市場で自分がもうとっくに特売品になってるなんてことをまだちゃんと認識できない]

- (3) 「結婚」に煮え切らない態度の娘に母親が読書にたとえてアドバイスする。

人家**那篇都翻过去**了，你**还老看这一页**，会背了也没用，[ほかのひとがあるお話をもう全部読んでしまっているのに、まだ同じページをずっと読んでる。讀んじたって役に立たないのに。]

5.6 既習の文法事項の復習とステップアップ

安頓の“口述実録”はインタビュー対象者の身分や年齢、性別などが明示されていて、読むものをきちんと選択しさえすれば、文法的にも難しすぎず易しすぎず絶妙なバランスである場合が多い。例えば前述した中級テキスト、荒川・周（2003）『中国見たり聞いたり15章』が挙げる文法ポイントのうち“对（于）～来说，一A就B，不仅A还B，除了～以外，连A也／都B，不管（多）～，舍得～”などが、生きた文脈のなかで実際に使われている。インタビューも皆目分からないことだらけであるとやる気も失せるというものだが、安頓のインタビューは実は少しの努力で手も足も出て、次へとつながるのである。ちなみに、荒川・周（2003）の全文法ポイントと安頓の《結婚不能让人更幸福，不如不结婚》の全16ページに出現する具体例が重なる項目は、同テキストの掲載順に以下に示す通りである。囲みのあるものは安頓の作品中に具体例があるもの、アミカケは類似の用例があるものである。

地	原来 (発見)	V 出来 (判明)	~过 (完了・超過)	为了
V 上 (付着)	不得不	V 起来 (完成)	当 ~ 时 (的时 候)	用不着
对 (于) ~ 来说	无论 A 还是 B 都 C	一 A 就 B	得 děi	比 A ~ 得多
不仅 A 还 B	即使 A 也 B	并	~ 过来	V 向
V 往	V 自	一排排	不但 A 而且 B	除了 ~ 以外
连 A 也 / 都 B	好不容易	有的 ~ 有的 ~	不管 (多) ~	像这样
非 ~ 不可	只要	不仅 A 连 B 也 C	一直 V 到 A 才 B	V O + 説明
只好	甚至	没 + 疑问 + 名词	为 A + V	一下子
不能不	不如	由于	舍得 / 舍不得	第一次
最后一次	拿 ~ 来说	至于	都快 ~ 了	最好
很少 + V	除非	这么一说	怪不得 / 难怪	偏偏
按照	形容词 + 得 A	别说 A 连 B 都也 C	[存現文]	说到 / 说起
开始 / 一开始	每隔			

囲みとアミカケを付した項目からも分かるように、中級テキストの文法項目の約 6 割がわずかに全 16 ページのインタビュー 1 本の文脈の中で使われているのだから、中級テキストを一冊学んだあと、あるいは平行して学習することで、活きた文脈のなかで文法事項の確認作業ができるというものである。

5.6.1 補語がどう使われているか

幾つもある文法的なポイントのなかでも動詞と補語は最重要であると言える。というのも、補語は代表的な参考書でも、たとえば守屋宏則 (1995) で「補語といっても「補欠、補佐、補講……」などから連想されるような「おまけ、つけたし、従的なもの」ではなく、むしろ文中ではもっとも重要な情報を表す」成分であると強調され⁷⁾、荒川清秀 (2003) では「中国語の動詞は動作そのものに関心があるけれど、結果にはあまり関心がない」というふうに記述されている⁸⁾。コミュニケーションにおいて、動作・行為・形容をきめ細かく中国語で表現しようとする場合には、補語を効果的に使うことが不可欠だと言えるが、参考書や辞書の解説や用例はそれ自体が役に立つものであるが、同時に文脈の中での用例の数をこなすことで、より体験的な学びから上手い使い方を身につけていけるのではないだろうか。例えば

《结婚不能让人更幸福，不如不结婚》の中に見られる補語をつかった表現には次のようなものがある。

(1) 方向補語

- 1) 我马上就退出这个游戏。[わたしはすぐにこのゲームから抜けた]
- 2) 长相不算丑，（中略）这种长相算中等偏上。但我剩下了，[ルックスは悪くない。この見た目なら中の上かしら。でも行き遅れちゃってるのよね]
- 3) 剩下就剩下吧，[行き遅れるなら行き遅れるだけよ]
- 4) 可那也不愿意我的东西被人全部以收拾的名义拿出来检视一遍，[それでもやっぱり自分のものを他人に全部片付けを理由にひっぱり出して一通り検査されたくはないわね]
- 5) 去香港出差赶上打折。[香港に出張したときにセールに間に合った]
- 6) 就这么耽误下去，[ちょうどこんなふう時間に無駄遣いしていく]
- 7) 结果两个女人都动起手来，[結局ふたりの女が殴り合いをはじめたの]

(2) 結果補語

- 1) 我总觉得我没遇见能说服自己跟他一起生活一起生孩子存钱的那个人，一有这种找错人搭错车的感觉，[わたしはいつも自分がこの人となら一緒に暮らして子どもをつくって貯金もしていけるって自分を説得できるような人に出会っていないように思うの。いったん人を見つけ損ねたりバスに乗り間違えたりって言うようなこんな感覚を持ちちゃうと……]
- 2) 说真话，“剩女”是“剩”的时间越长越不容易找到能欣赏的人。[ほんののことを言うと、負け犬は独りの時間が長くなればなるほど気に入った男の人を見つけるのが難しくなるのよ]
- 3) 中午吃饭要了茶水，（中略），他坐在我对面把这个茶叶嚼碎了碾干了，[お昼にご飯を食べたときにお茶も注文したんだけど、かれは私の向かいに座ってお茶葉をくちやくちやに噛み砕いて、それからチューって水気を吸っちゃったの]
- 4) 在家待腻了才找你，[家で手持ち無沙汰になるとやっとあなたに連絡をよこす]
- 5) 最后我想明白了，[最後にわたしは（考えて）ちゃんとわかったの]
- 6) 后来终于解释清楚，[最後についにはっきりと説明した]

(3) 可能補語

- 1) 年轻时就在一起工作，一直叫“小赵”，现在改不过来。[若いときから一緒に働いて、ずっと「趙ちゃん」って呼んでるから、今さら直せないの]
- 2) 我觉得就算当时跟他回去，也好不了，[わたしは当時彼について（彼の故郷に）帰ったとしても、上手くいかなかったと思う]
- 3) 孩子都生不出来了 [こどもも産めなくなった]
- 4) 你闺女是不是心里有什么自己喜欢可是嫁不了的人？[あなたの娘さんの心のなかに]

は好きだけれども結婚できないひとが居るんじゃないの]

5) 打死我也**写不出**。[死んでも書きたくない]

6) 我**说不清楚**，举几个例子吧。[わたしは上手に説明できないから，幾つか例を挙げるわね]

(4) 様態補語

1) 一辈子这么短，高高兴兴过还嫌日子**过得快**，[人の一生なんてこんなに短いんだから，楽しく過ごせたらもっと月日の経つのが早いのが嫌になっちゃうわよ]

2) 庄重**显得成熟**，下班就别那样了 [かたくてオトナ過ぎるわね，仕事が終わってからもそんな服着てちゃダメよ]

3) 但总体来说还是**活得很开心** [総じて言えばやはり楽しく過ごしている]

4) 到家**累得连吃饭都没精神**，[家についても疲れてご飯を食べる気力もない]

(5) 数量補語

1) 刚学的时候把1200块钱一把的拍子打断**好几把**，[レッスンを始めたばかりの頃は一本1200元のラケットを何本も折った]

ここに挙げたものは《結婚不能让人更幸福，不如不结婚》の全16ページの用例のほんの一部であるが，それでもかなりの補語が使われているであろうことが分かる。このような生きた文脈で，初級で一応習うけれどもこの際きちんと押さえておきたい動詞と補語の用例に大量に触れることで，その使い方の様々を理解することも，話の展開に着目した一つの学習法ではないだろうか。千野栄一（1986）は「言語はそれだけで単独に使われるのではなく，必ず何かある状況の中で使われる。この状況は，いろいろな情報を言語に与える。従ってこの状況がよく分かっているれば，その言語の理解が容易になる。そしてその言語が伝えている内容が具体的に把握されれば，その言語の理解がより容易になることは自明のことである。ここにレアリアが大切な理由がある」と言う。つまりこれを補語について考えてみると，動作・行為が例外なくある状況下で行われていて，その状況が情報を与えているのが補語なのであるから，補語が何を伝えようとしているのか，切り取られていない生きた文脈のなかで使われている補語に慣れることは，その理解を容易にする有効な方法であるはずなのである。

中国語では動詞は動作そのものしかカバーしないために，様々なケースで補語を効果的に使えないと，込み入ったことまで表現しきれない。インタビュー記事を利用した学習で，ただ翻訳してそれでおしまいというのではなくて，活きた文脈の中でどのように使われているか，という踏み込んだところまで把握しようと思えばできるのである。初級をマスターして中級への階段を上ろうとするとき，上述の荒川清秀（2003）も言うように「一歩すすめるためにはとりわけ補語の学習に力をいれてほしい」というのが教授する側からの本音である⁹⁾。

5.6.2 介詞の後置に慣れる

また介詞フレーズも、述語である動詞・形容詞よりも前となる一般的な使い方は初級のテキストで必出の事項である。《结婚不能让人更幸福，不如不结婚》では、例えば次のような過去の恋愛経験を語るくだりに、“我在外国公司**做到中层** [わたしは外資系で中間管理職になるまで頑張ってきた]” “不想把时间**浪费在路上** [時間を通勤に浪費したくない]” “她有过男朋友，(中略)，但她坚持不让这人**住在自己家** (中略) 她也从不**住在他家** [彼氏が居たこともあるけれども、絶対に自分の家に泊めなかったし、自分もこれまで彼の家に泊まったことがない]” “一直不能跟一个人**发展到结婚** [ずっと一人の男性と(付き合いが)結婚にまで進展しない]” “有一片茶叶被他**喝到嘴里**，(中略)，啪地**吐回到茶杯里** [彼はお茶葉を一枚くちの中にふくんで、それから湯のみのなかにペッって吐いて戻した]” など数多く現れる。守屋宏則(1995)も説明するように、介詞の後置とは、文語の名残である“于”“自”“往”“向”および“在”“到”が述語の後に置かれるものである¹⁰⁾。ここでは“在”と“到”が、さまざまな動詞とペアになって述語に後置する例が多数学ぶことができる。

6. さいごに

一般人が身の上や特定の話題で自由に喋ったそのままの記録であるレアリア“口述実録”は、たしかに文法や語彙が規範的な使われ方をしていないかも知れないが、レアリアの文脈を通して、ネイティブなら自明の事象やことばの文化背景が見えるという特長がある。さらに、多少なりとも教養のある人なら多用する四字成語、四字熟語しかり、外国人学習者が実際のコミュニケーションで役立つ「道具と方法」を、生きた文脈で実例を通して学べる場面が数多く、中級、上級へのステップに活用できるであろうことは想像に難くない。さらに「寄り道」で、見慣れないけれども実は身近な単語、或は表面的には理解できているようで実は理解しきれない単語などを手がかりに、中国語の文化背景をさらに深く理解できる、という効果もある。

本稿で紹介した学習のさまざまなポイントからも、千野栄一(1986)が「レアリアというものは、学問のように体系だったものではない。しかし、その蓄積は常識の一部をなすものであり、外国語の上達のために必要な、その外国語が話されたり書かれたりした背景のレアリアに通ずるということは、とりも直さず広い知識が要求されるということなのである。要するに、日頃から学習している外国語の背景を知るようにその外国語を支えている文化の基盤について学ばねばならないということで、「会話の上達に必要なものは？」という問いに、「内容」という答が出て来たのと同じ発想である」と言うように¹¹⁾、当たり前のように言わ

れて来たポイントが再確認できるのである。結局のところ、語学の学習に早道、抜け道というのではないのであって、昨今流行のあれか、これかの選択と集中ではなく、語彙・文法というテクニックからさらにはことばの文化背景まで押さえておかねば、分かったことにはならない。恩師からの受け売りの表現で言うならば「あれもこれも」の一つとして活用しない手はない、というのがレアリアとしての“口述実録”を中級・上級へのステップの道具として活用してきた筆者の思うところである。

注

- 1) 何をレアリアというかについては、中西千香・荒川清秀・明木茂夫・塩山正純・植村麻紀子（2016）「中国語教育におけるレアリアの有用性～『レアリア読本（仮称）』作成に向けて～」(『日本中国語学会全国大会予稿集』所収)より抜粋した。
- 2) 千野栄一（1986）188頁参照。
- 3) 张辛欣・桑晔（1986）《北京人 100个普通人的自述》（上海文艺出版社）は、同時代の中国人の生の声を拾ったインタビュー集の嚆矢の一つである。時まさに改革開放
- 4) 筆者自身は张辛欣・桑晔（1986）ではこの他にも「〈文凭〉李小航 她是中华人民共和国的同龄人。」「〈游行……〉金敬宜，男，四十三岁，满族。」を授業で学習している。
- 5) 中川正之（2005）94頁から109頁参照。
- 6) 《结婚不能让人更幸福，不如不结婚》での用例は“我跟人同居过 [わたしはオトコと同棲したことがある]”，“隔壁是三代同堂的一家 [お隣さんは三世代同居の一家だ]”である。
- 7) 守屋宏則（1995）169頁参照。
- 8) 荒川清秀（2003）iv 頁参照。なお、同書は動詞と補語を重視し「動詞と結果補語」「移動動詞・方向補語」の二つの章で詳細に解説している。
- 9) 荒川清秀（2003）iv 頁参照。
- 10) 守屋宏則（1995）139頁参照。
- 11) 千野栄一（1986）192頁参照。

参考文献・テキスト

- 千野栄一（1986）『外国語上達法』（岩波新書）
 张辛欣・桑晔（1986）《北京人 100个普通人的自述》（上海文艺出版社）
 守屋宏則（1995）『やさしくくわしい中国語文法の基礎』（東方書店）
 北原保雄（編）（2002）『明鏡国語辞典』（大修館書店）
 荒川清秀・周閲（2003）『中国見たり聞いたり15章』（光生館）
 荒川清秀（2003）『一步すすんだ中国語文法』（大修館書店）
 中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』（岩波書店）
 吴晓露他（2008）《说汉语谈文化》（北京语言大学出版社）
 安顿（2011）《结婚吗》（九州出版社）

中国語学習におけるレアリアとしての“口述実録（インタビュー）”活用について

中国社会科学院语言研究所词典编辑室（2016）《现代汉语词典第7版》商务印书馆
中西千香ほか（2016）「中国語教育におけるレアリアの有用性～『レアリア読本（仮称）』作成に向けて～」(『日本中国語学会全国大会予稿集』所収)

[付記] 本稿は口頭発表「中級テキストからのステップ～レアリア“口述実録(インタビュー)”は「使えるところ」満載～」(中国語教育学会研究会「レアリアのツボ, レアリアのチカラ～レアリアで学ぶ, 教える中国語のために」2013年10月12日)と「中級テキストからのステップ レアリア“口述実録(インタビュー)”の「使えるところ」再考」(科研(課題番号25370639)メンバー内部研究会2014年5月31日)をもとに, 科学研究費補助金基盤研究(C)「中国語教育におけるレアリア活用方法の構築」(代表: 中西千香, 課題番号16K02848)の成果の一部を加えて再構成したものである。

